

復興ワードマップ・パラダイム研究会（第15回）速記録

日 時: 2020年5月12日（火）10:00～11:40

場 所: Zoom

参加者: 近藤、宮本、李、石原、宮前、大門、高原、中川、立部（記）（敬称略）

➤ 話題提供「災害復興のパラダイムロストとパラダイムリゲインド」（宮本）

● 「復興しない被災地」問題

- ・大前提として、復興しない被災地が増えてきた。数年たっても風景が変わらない。背景として、行政の規模が縮小されて職員が減った、復興にかかわる職人の数が減った、資材が足りないなどの社会資源の減少がある。今までのペースで被災地が回復できなくなっている。今後の社会は人口減少をはじめとして、右肩上がりでは成長するのではなく、小さくなっていくだろうと予想される。これまでの災害復興は、右肩上がりでは社会がよくなっていくことを前提になされたり、そのための制度がつくられたりしていたが、これからはそうではない方向に切り替えなければいけないだろう。復興のパラダイムを獲得し直さないといけない。
- ・しかし、現実はそうっていない。パラダイムシフトして、個人の生活を保障しつつ未来の適正規模に合わせた復興にしよう、というのとは対極の復興がなされている。一つは、復興の過剰。右肩上がり前提にしていた時代の復興以上に、右肩上がりの復興がなされている。陸前高田の復興など。もう一つは、復興の過小。復興しない被災地。大阪北部地震で被災した街並みも、ブルーシートがかかったまま。
- ・現場だけではなく、災害復興業界でも、今になって **Build Back Better** という言葉が使われるようになってきている。これまで復興の議論が盛り上がってきた背景には「復興とは何か」という問いがあった。中越地震をきっかけとしている。よりよい未来が描けない時に、それでも復興したと言えるのはどのようなときかという問い。「よりよい」を問い直そうとしていたのに **Build Back Better** で **Better** を素朴に受容している。

● パラダイムシフトの解像度を上げる

- ・パラダイムシフトしようと思っても、簡単にはできない。なぜか？
- ・パラダイムシフトを求められる社会、既存のパラダイムが消えかかっている社会には特徴がある。
- ・パラダイムをもう少し丁寧に見ると、既存のパラダイムが失われるパラダイムロストと、新しいパラダイムを獲得するパラダイムリゲインドがある。分けてみると、パラダイムロストに特徴的な問題が見えてくる。それがパラダイムリゲインドを拒んでいる。

- パラダイムロストの効果

- ・パラダイムロストの問題は、身の丈に合わない復興がなされるだけでなく、破滅的なギャンブラーのように、社会を加速度的に破綻させるような効果がある。
- ・パラダイムロストは、よりよい未来が描けない、十分な資源が用意できないことによって生じる。そういう状況で被災した時、人々は被災した現実を見なかったことにする（集合的否認）。そして、これを完成させるロジックが悪しき両論併記。例えば「床上浸水だけでなく床下浸水の家も大変だ。5年後10年後住めなくなるぞ。何とかしないと」と発言しても、「そうは言っても、お年寄りにそこまでさせるのは酷だ。熱中症の危険もある」など、高齢者の問題、熱中症の問題を持ち出される。だからと言って、「高齢者の世帯は重点的にサポートしよう」「熱中症の危険性がある時期は避けて秋にもう一度活動しよう」とはならない。「あれも大変、これも大変」と言って、別次元の問題を同じ土俵で比べて、元の問題をあいまいにしてしまう。悪しき両論併記を通して、集合的否認は厄介になる。「問題は見えています。けど難しいんです」と言われてしまう。見ているふりができる。

- パラダイムリゲインドにむけて

- ・パラダイムロストによる問題は、未来のとらえ方に原因があった。未来を積極的に描けないことによって生じている。ここで未来というのは非常に特権的な地位が与えられている。未来の視点から現在が価値づけられる。インストゥルメンタルな時間感覚。それに対して、現在の意味が未来に疎外されずに現在のうちに充足されることをコンサマトリーな時間感覚という。
- ・パラダイムロストが社会に加速度的に破滅をもたらすのは、現在の意味が過剰に未来に疎外されていて、未来が破局的な価値しか持っていないから。
- ・であれば、その処方箋は二通りある。一つは、現在の意味が過剰に未来によって価値づけられるのを避ける（下から積み上げるイメージ）。もう一つは、積極的に受容できる未来、よりどころとなる新しいパラダイムを獲得する（上から降ってくるイメージ）。ここでは前者からの方策を考える。

- コンサマトリーの回復方法

- ・矢守克也「〈待つ〉時間－補論：アクションリサーチの〈時間〉－」より。
- ・インストゥルメンタルとコンサマトリーは互いに排他的なものではなく、特徴的な機能連関を持っている。インストゥルメンタルが膨れ上がればコンサマトリーがなくなる、というだけではないつながりがある。
- ・コンサマトリーの回復には二通りある。一つは、インストゥルメンタルを拡大させる方策。例えば、徹底した津波防災を実現しようとする、一人ひとり地域にどのような人

がいて、どういう暮らしをしているのかをつぶさに見ることになる。インストゥルメンタルを徹底することで、かえってコンサマトリーが高まってくる。もう一つは、インストゥルメンタルの要素をより小さくしてコンサマトリーを回復する方策。例えば「めざす」かわりと「すごす」かわり。インストゥルメンタル（めざす）を一旦やめてみる。

- ・ 鷺田清一『〈待つ〉ということ』に関連付けて整理。待つことを成就させるための方策。「開け」：未来に何かがあるという期待を一切排して、自らを開いておくこと。これがパラダイムリゲインドを実現するための処方箋としている。
- ・ その考えには賛同するが、そのトーンは、何か特別な実践、悟りに近い感覚を獲得しないと実現しないのではないかという印象も与えかねない。

● 〈待つ〉こと再考

- ・ もう少し異なるトーンでインストゥルメンタルの縮小を実現することを考える時に、〈待つ〉ということ再考。鷺田の〈待つ〉と逆に、もっと凡庸な〈待つ〉ということに目を向けたい。簡単に成就する〈待つ〉。誰も日常に経験するような、「繰り返し訪れてささやかに成就する〈待つ〉」。

● 「つなぐ」かわり

- ・ 被災者には再建や復興のフェーズがいくつもあり、それに関する研究もいくつもあるが、フェーズとフェーズの間を支える支援が少ないのでは。フェーズとフェーズの間の時間を、希望を持って待つことができなければ、それぞれのフェーズでも自ら十分に関わることができない。そこはなかなか言語化されにくく、明確な成果が表れるわけでもなく、お金もつきにくい、重要。定期的に被災地に訪れる人（支援者）はたくさんいる。それにも重要な価値があるのではないか。一足飛びに華々しい未来を描くことができるわけではないが、訪問者を待つことで次の1か月を過ごすことができる。
- ・ 現在から遠い先にある大きなパラダイムではなく、現在から少し先にある未来をつなぐような、「ささやかに成就する〈待つ〉」を重ねることで、点と点で存在するコンサマトリーを回復して、結果未来への希望を失わずにいられる。インストゥルメンタルを失調させずに、インストゥルメンタルをも機能させる。どう生活再建をしようかということにつながる。コンサマトリーを回復することで、インストゥルメンタルが豊かになる。
- ・ これはまだパラダイムリゲインドまで至っていないが、そういう実践を重ねていくことが重要。

➤ 質疑、ディスカッション

- ・ (近藤) 両論併記、価値相対主義的なやり方の一つのバリエーションとして、もしくは

同じベクトルのアクションとして、各論をあげつらっていくやり方で「あれも大事、これも大事」「仮設も、高齢者も、熱中症も」と、課題をどんどんエスカレーションして、良い・悪いをないまぜにするようなムーブメントも見受けられる。現在の防災の分野をみていると、「これも考えないと、こういう見立てもある」とやたらリストアップして身動きをとれなくしていくやり方のドライブが大きい。論点をやたら挙げて、最後に何の議論だったかわからなくなり、結局やらないということは往々にしてある。価値相対的というよりも、やたらそういうことを繰り返すムード。やたらデータを持って来るムード。「社会が加速度的に」と言われたが、社会のスピードだけが速まっていくので、追いつけない。今の政権のほころびも次々と表れて、手が付けられない。加速した社会のなかの「加速度」の問題。ものすごく負荷をかけないと止まらない、修正が効かない。ハンドルがさばけない。

- (宮本)「次から次に」「加速度的に」がキーワードだと思う。悪しき両論併記に至る背景は、価値相対主義的なやり方が広まるという説明もできるが、フロイトが言う「神経症者」が不安を埋め合わせるために反復行動をしているというロジックもあり得る。よりよい未来を想定できないときに、その代わりになるような未来を次々に代入する。次から次に論点を持ち出す人は、自分が理想としている未来に対して何か不足を感じており、その不安を取り除くために反復行動に出ているという説明の仕方もできるのではないか。幸せな研究者はそういうことはしていない気がする。
- (近藤) 目的が共有できている人はスピードを加減したり歩調を合わせたりできると思う。共有できていない人は、問題にコミットしているという姿勢は見せようとするが、神経症的な病態・行動が生まれているように感じる。研究や調査や報道すること自体を目的化している人、自分のポジションを確保するために情報発信すること自体を目的化している人は、慣性の中で日和見をして、アクションすることには真剣にコミットしない。
- ・ (近藤)「つなぐ」かかわりをいかに可視化するかが大事なように思う。時・時間を可視化することは、一方でわざわざ多いことだと思うが、例えば「広島坂町に来て10回目」など、行動の蓄積を明示化すると味わい方が変わるということ(アニバーサリー)は、日常的にやっていると思う。それを明示化するとみんなうれしくなる。でも、それはわざわざにもなる。「20回目を目指して」と言うと、手段が目的化する事態が待っている。愚直なやり方をもってしても、過去の蓄積と、現在のポジションと、ちょっと先の具体的な未来を目に見えるようにしてつながないと、やはり悟りを開いた人しか到達できないムードに陥ると思う。
- ・ (李) 社会背景から見ると、日本は戦後の低迷の時代を経て、高度経済成長があり、バブルとその崩壊があり、現在低迷の時代を迎えている。高齢世代は、今は高度経済成長

期のような時代を待つ時期だと、今を我慢すればその先にはいいことがあるという意識がある。しかし、次の高度経済成長はない。だから現在の社会のパラダイムを調整したり、パラダイムがロストすることを問い直したりすべき。

→ (宮本) 加速度的な破滅をどう乗り越えるかが今回の論文のテーマ。まだパラダイムリゲインドには至っていない。パラダイムリゲインドを考えようとする、これまでの社会の動き方の理屈を再考して、それが未来にもう一度可能なのか、可能でないとしたらどういふ理屈で動く未来を考えたらよいかを問わないといけない。ただ、もう一度成長はあり得ないと思う。国民国家という枠組みも、私たちが思っている以上に早く機能しなくなると思う。日本がこれまで何とか安定的にすごせたのは、分厚い中間層がいたからという議論もある。技術革新もあり、余裕のある人たちが一時期増えた。それは国外の人たちを搾取していたから成り立ったことだが。その中間層が崩れかかって、格差が広がっている。分厚い中間層をもう一度取り戻せるのか、取り戻せないとしたらどうするのか、それが大事な論点。民主制のようなガバナンスのあり方も密接につながっていると思う。国民国家で民主制を展開させるには、分厚い中間層、余裕のある人がたくさんいて、「なんで私のお金をあんな奴のために使わないといけないのか」と考える人が少ない、という状況でないといけない。これからは、国民という幻想を通じて人が支え合うということは難しくなると思う。

→ (李) 台湾は、日本のような経験をしたことがないので、一部の人はそういうことを目指そうとしている。台湾がどうやって日本に続くのか、あるいは独自でいくのか。その参考になると思う。

→ (宮本) 参考にするとき、国家の規模という問題もあると思う。2億人がやるのか、200万人がやるのか。もともとルソーたちが民主主義をどう成り立たせるかという議論をしたとき、どういう規模を想定していたか。2億人ではないと思う。台湾と日本は似ているようで、戦略は異なる可能性がある。

・ (大門) 「パラダイム」という言葉の使い方の確認。クーン『科学革命の構造』では、既存のパラダイムと別のパラダイムが政治的に戦いながら、別のかたちが変わっていく。だが、ここで言われているパラダイムは別のような気がする。「パラダイムを獲得する」というのが、まったく違うパラダイムと一緒に共通に創り出すということなのか。パラダイムをリゲインドするというのはどういう状態なのか。クーンが言っているパラダイムシフトでは、自然に人々が賛同していくことで集まる。例えば相対性理論の時は、古典的なものから相対性理論に変わっていく瞬間は、最初はみんな敵対的だったが、ある瞬間から突然変わっていく。実践的に変わっていったという感じがあまりしない。「リゲインド」するという、パラダイムの使い方とは？

→ (宮本) クーンの理論では、パラダイムシフトは連続的には起きない。科学のよりどころになる世界観が変化する時は、ちょっとずつ連続的に変化するのではなく、最初エィ

リアンのように入って来たものが、気が付いたらヘゲモニーになる。その科学変革の構造が社会変革にも適用できるのではないかという考え方。クーンが考えていた科学革命の話を考えて、エイリアンみたいなものがやはりやって来る。旧来のパラダイム下にいる者が努力してどうこうするというより、外から変なものがポンと入って来てパラダイムシフトが起きるというイメージ。ここでの議論、あるいはマルクス主義者が「ヘゲモニー」と言う時のパラダイムシフトは、そこにもっと人間が関わる余地を見いだそうとしていると思う。クーンが使っているパラダイムのニュアンスとは違う。

・(近藤) もともと引きこもりがちでITの得意だった学生が、コロナ禍でITを駆使して生き生きしてきている。社会のルールが外部的に変わることでパラダイムがジャンプすることはあり得ると思う。

・(大門) 野田村に住んで約3か月。復興から次のフェーズが何になるのかわからないという感覚の人が多いと思う。共通のパラダイムを獲得していくのが難しいと感じている。復興の次をどう語り直すのか。まちづくりと復興の区別がつかなくなっている。被災した人、被災していない人がいる中で、新しいパラダイムを獲得する時の〈待つ〉、「開け」は実践的にどうしていったらいいか。

→(宮本) アイデア次第。みんながワクワクすることができるか、に尽きると思う。

・(近藤) 今の野田村の雰囲気は？

→(大門) コロナで人が集まるのが難しい状況にあるので余計にそう感じるのかもしれないが、外に出て来ない人が増えて、家庭内で何が起きているのかが見えない。今、自分は被害があまりなかった地域に住んでいる。外から来てコミュニティの中に家を建て直して住んでいる人は、コミュニティにあまりなじめていないように感じる。沿岸部と、盛岡などの内陸部を比べても、小学校の震災の教育で「東日本大震災を聞いたことがあるか」という質問に対して、30%の子どものしか聞いたことがない。沿岸部で何があったのかを語ることはばかられている。「一緒に災害に強いまちに」ということを行政は言っているが、住民の中では細かい分断があり、共通の話題として「一緒に考えよう」というのは実際には難しい状況。

・(近藤) 多くの大人が9年前に「大変だったね」と言う時や、津波から逃れて再会した時も、顔が見えただけでも感動的な出会いをしていたと思うし、実感していたと思う。コロナ禍でもじっと耐えた後でお互いが直接出会えたことを喜び合えたり、9年前に各家庭でどう凌いできたかを語り直したり思い起こしたりという試みもあるのかなど。それをしっかり見ることが、研究としても、実践としても大事だと思う。

・(大門) 野田村で、みんなで本を読む屋台をつくった。普段出会わない人や本と出会うことができる。カフェをしたり、ビールを出したり、外の人にオンラインでつないでアバター式で参加してもらったり。場所があることで、「ここでこれをやったらいいのでは」というような話ができる。

- ・(宮本) 日本社会には「課題解決」という病気が流行っている。問題をとにかく見いだして「大変だ」と言う病気。それを叫ぶほど「解決」の当事者である人たちが力を失っていく。本末転倒。問題を解決しなくていいということではなく、問題を見いだす中で、問題解決するための力が失われているのではないか。糸魚川大火のあった地域では、大火の後にキッチン付きの会議室をせっかくみんなで作ったが、コロナのせいで使えない。お母さんたちの元気がなくなって悩んでいる。けど、だからこその状況で何がやれるのか。どうしたらみんながそこに存在していていいという承認を得られるのかを考えることが重要。他者からの承認は直接会わないと得られないのかということ、そうではないはず。西宮在住で、阪神・淡路大震災で下半身不随になった方が「今することがないからマスクでも作ろうと思ったけど、材料が売っていない」と。そこにアベノマスク問題。これも課題解決病の一つだと思う。「マスクがないからマスクをあげましょう」ではなく、一人ひとりがこの危機を乗り切ろうとしている力をどう引き出すかが重要。人口減少社会でも重要になると思う。マスクを作って誰かに届けば、承認が得られる。
- ・(宮前) 過剰な復興に関連して。「ムーンショット」という言葉がよく聞かれると思う。文科省の「ムーンショット型研究開発制度」など。よくわからないけど、わからなさが魅力的に映ってくる。そこにイチかバチかを賭けようということが流行っている。そういうものに響くものがあると思う。
- ・(宮前) 「つなぐ」かかわりに関連して。ハンナ・アーレントは「予期できないものに対して人間ができることは、約束することのみだ」と。約束というのは一方的に誰かが誰かに責任を果たすような行動ではなく、双方向的に約束し合う関係の中で生じるもの。「つなぐ」かかわりが、未来というものを約束する。〈待つ〉をもう一步超えたもの。約束し合うことでお互いが存在し合う、という時間になっているのかなど。
- ・(宮前) 「フェーズとフェーズの間をつなぐ」という表現をしているが、今がどのフェーズかすら分からないような状況下でこそ、「つなぐ」かかわりが本領発揮するのではないか。今がどういう状況かわからないけど、その人が来てくれるのがうれしい。「フェーズとフェーズの間をつなぐ」ということから、そうでないところにまで応用される想定があるか？
- ・(石原) フェーズとフェーズを乗り越えるというよりも、フェーズということすらないのでないか。
- (宮本) 災害研究で「フェーズ」という言葉が安易に使われている。それだけではない時間が被災地にはあるということを伝えたくて「フェーズとフェーズの間」という言い方をした。そのためフェーズというものが自明に存在しているような表現になってい

る。しかし、「すごす」かかわりや「つなぐ」かかわりがないと、フェーズ自体も存在しないだろうし、今のフェーズや次のフェーズをどう見てどうかかわるかという主体性もなくなると思う。

- ・(宮本)「開け」の考え方はハイデガーか？
- (高原)被災者の〈待つ〉を、ハイデガー『存在と時間』の言葉で言うと、「日常性」「非本来性」の二つのモード。非本来性は言い換えると日常性であり、いろいろなものの関心に自分が分散してしまっている一般人のあり方。それに対して本当の存在の意味をとらえるためには本来性に立ち戻らないといけない。日常性・非本来性の時間のあり方は、過去・現在・未来。本来性のあり方は既在・瞬間・到来。やや「悟りを開く」ようなニュアンスに近づく。ハイデガーの言い方だと、本来性の時間のあり方(コンサマトリー)に戻らないといけない。仮設住宅の被災者は、日常性の中で〈待つ〉や未来を取り戻す。ハイデガーとは逆の見方をしているのがおもしろいと思う。
- ・(宮本)考えれば考えるほど、自分が結局「こういうやり方もある」と主張していることが、鷺田の主張であるような気もしている。
- ・(高原)論文中の「限られたリソースを何につかうのか、何を犠牲にするのか、人々の利害が鋭く対立する中で、議論をまとめ上げていくのは簡単ではないだろう」というのは、鷺田の言っていたことに通じると思う。「哲学カフェ」をしなかったら両論併記になると。両論併記をせずに哲学の中で公共性を作っていくときに、対話や哲学カフェがある。両論的に用いらなくても、ギリギリのところ現実の度合いの感度を保つときに、「開け」や〈待つ〉が出てくるのかなと。
- ・(立部)過剰な復興は「ギャンブル的」なのか？過剰な復興に走る背景には、破滅的な未来しか待っていないと分かっているけど、そうは言っても今の安全を担保しないといけないとか、いろいろあると思うが。この先の資源が十分でないということすら理解せずにやっているのか、理解しながら“博打”に打って出ているのか。
- ・(宮本)追い込まれた時に不合理になるということを言いたい。結果としてギャンブル的に現れる時もあるし、そうでない時もあると思う。「ムーンショット」は“博打”的、ギャンブル的なように思う。東北の復興の堤防は、ギャンブルとは違うかもしれない。
- ・(石原)自然災害の課題は明確で共有可能だと思うが、コロナの情勢を見ると、本質的な課題を共有できない。本質に至っていないのではないかと。外出している人をあげつらう話など。コロナ禍の集合的否認はどう考えたらよいか。
- (宮本)コロナをめぐる動きも、集合的否認に似たものがあると思う。パチンコ店に並んでいる人ばかり報道するとか。落書きされた居酒屋の話とか。大事かもしれないが本質から外れていると思う。本質を見るとつらいから。日本社会は諸外国と比べて余裕が

なくて、給付を要求することが難しく、これ以上国債を発行したら円の価値自体がどうなるかもわからない、という話なのかもしれないが。それを見なかったことにするために、とりあえずパチンコに並んでいる人を報道しておけば一時の留飲は下がるか、と。

- ・(近藤) コロナの問題は後日また立ち止まって考える必要があると思うが、ここで大きく世直し・立て直しをして、ニューノーマルのように、これまでの積み上げをグレートリセットして乗り込んでくるという勢いも感じる。「課題解決病」のスピードをあげる短絡を注意して見ないといけない。コロナよりも前に何をしていたのか (before コロナ) をこそ、注視して分析する必要がある。

- ・(中川) コロナにしても災害にしても、最初は課題を共有していたはず。しかしその先の結末が見えていない、共有されていない。それが問題を深刻化しているのではないか。
- (宮本) 災害復興をめぐる問題をより極端な形で表しているのがコロナ。災害復興はコロナに比べればまだ、「壊れたものを直さないといけない」「コミュニティを回復しないといけない」と、何となく結末が見えやすいかもしれない。それでも共有しにくくて、パラダイムロストが生じている。平時の社会の中ですでに起きている・抱えている問題や、あいまいになって見えにくくなっている問題が、コロナの中で極端に分かりやすく見えているという印象。
- ・(中川) コロナの問題と自然災害の問題はひとまとめにして考えられるのか？
- (宮本) コロナの問題と自然災害の問題は同じロジックで考えられると思う。今よくポストコロナの議論がされているが、プレコロナを見るのが重要。コロナの状況になったからこそ見える、コロナ前の社会。コロナ前から抱えている問題が大きくなっているものもあれば、コロナの前から可能性としてあったものがコロナ後の社会で花開く可能性もある。Zoom や、グループウェアの掲示板にしても、これまでも活用して教育のやり方を変えられるはずだったのにさぼっていた。コロナ禍でコロナ前を見るのがコロナ後につながると思う。そういう意味ではコロナと自然災害はひと続きで、同じ見立てで見た方がよいと思う。

(了)